

巻頭言 紀要の発行に寄せて

弘前医療福祉大学短期大学部

学長 相澤保正

2009年に開学した弘前医療福祉大学は、2019年3月までに紀要を第10巻 第1号まで発行しており、2002年に開学した弘前医療福祉大学短期大学部（前身は弘前福祉短期大学）は、2019年3月までに紀要を第7巻 第1号まで発行してきた。この両大学が発行する紀要を統合して1冊にまとめるかどうか、という建設的な多くの意見があり、両大学の紀要編集委員がこのことについて議論を重ねてきた。

この度、統合についての概要がまとまり、両大学教授会の了承の下で、新しい学術誌である弘前医療福祉大学 弘前医療福祉大学短期大学部 紀要 第1巻 第1号が発行されることになった。誠に喜ばしいことである。

短期高等教育機関としての本学においては、教育と研究をその活動領域の両輪としている。教育と研究は別個の独立した活動ではなく、質の高い教育を行うためには豊かな研究活動が必要である。

紀要は多様性を持ったacademic paperでもあることから、研究論文、報告書のほか、短報、資料なども含まれ、将来が期待できる展望などが述べられていると覚醒させられるものである。

私は第二次世界大戦のとき、東京の渋谷に住んでいた。毎晩、アメリカのB29爆撃機に脅かされて過ごしていた。そして遂にあの東京大空襲の昭和20年3月の夜がやってきて、渋谷は一面焼野原となった。かろうじて生き残った私たち家族は、父が1人東京に残って、家族4人は父の故郷の北海道の親戚を頼って、移住することになった。

北海道では8畳ひと間に4人で暮らした。食べ物がなく、イモとカボチャばかりだった。小学1年の私は、その頃から日本はダメな国だと思い込んだ。ずーっとその思いで、十勝の小学校に通っていたが、昭和24年に湯川秀樹博士が、日本人で初めてノーベル賞を受賞したことを知り、急に心がパッと明るくなった。私は湯川博士の受賞を機に、日本人ってダメでないのかもしれない、と思い直し始めた。2人目のノーベル賞受賞者朝永振一郎博士まで、少し期間があったが、その後陸続と日本人がノーベル賞を受賞している。今では世界で7番目の受賞者の多い国となった。日本人の知を誇りに思う今日この頃である。

本学教員の知の結晶が大きな成果へと繋がり、その成果が人々の幸せな暮らしに役立つことを願いつつ、本学の学術誌である紀要の発展を切に願う。(2020年3月)